

第12回日本体験コンテストin大韓民国 実施報告

面接・表彰日時：

2009年9月19日（土）9：30～12：00

開催場所：大韓民国ソウル市 ロッテホテル 36階

主 催：（財）共立国際交流奨学財団

後 援：文部科学省

在大韓民国日本国大使館公報文化院

東亜日報

ANA

協 賛：（株）共立メンテナンス



表彰式の様子

企画書応募総数 96 名の中から 12 名の企画面接候補者を選考し、2009 年 9 月 19 日（土）9：30～11：00 大韓民国ソウル市のロッテホテル 36F Berkeley Suite にて 12 名の企画書プレゼンテーションを含む面接が審査委員 3 名で実施された。その結果、「夢・日本体験賞」に入賞した 5 名には賞状と企画実現のための賞金として 30 万円が授与された。

入賞者（5 名）と企画概要報告 テーマ「日本で実現したい夢」「日本で体験したい事」

※企画書の一部を西田が抜粋しました

① 崔 完鍋（チェ・ワンホ）ソウル大学 経済学部

テーマ：「世代を越える老舗の力」—関西の商人から学ぶ伝統の継承と革新—

一般的に「企業の寿命は 30 年」と言われているが、環境変化の激しい今、企業の寿命は更に短くなっている。東亜日報の平成 19 年 10 月 11 日の記事によると、韓国では新生企業の 40% が 5 年も持たずにつぶれたそうだ。そして創業 100 年以上の企業も斗山と東洋薬品工業の 2 社にとどまる。しかし、日本には 3 代以上または 100 年以上継続している企業としての「老舗」が 10 万社以上あるという。そして、日本には世界最長寿の企業とされる社寺建築の「金剛組」をはじめ、創業 1000 年以上を超える会社も 7 社が存在する。激動する時代を生き抜いて日本の老舗が存続できた秘訣はどこにあるのだろう。それは、各々の会社が自らの伝統をしっかりと継承しながらも柔軟に革新し続けてきたことであると思う。本企画は、日本を代表する商業の都と呼ばれる大阪・関西圏の老舗を直接訪問し、企業の長期存続の原因と背景を調査することを目的としている。

② 金 珪映（キム・ボヨン）慶熙大学 言論情報学部

テーマ：「お茶の香りが集まるところに日本がある」—お茶の産地から現代の日本茶カフェまで、日本茶のすべてを探して—

日本で一年間留学しながら不思議だと思ったのは学生食堂にお茶の給水機があったことである。それに給水機は玄米茶、麦茶、ほうじ茶の三つの種類のお茶があって自分の好みによって飲みたいお茶を飲むことができた。もちろん食堂にはお水もあったが、ほとんどの日本の学生はお茶を飲んでいて、韓国の食堂ではお水の給水機しかないし、ほとんどの人は食事の後にお水を飲むのでその文化の違いがとても面白く感じられた。これは言葉の習慣でも表れる。お互い話し合いたいとき韓国人は「コーヒー飲みに行こうか」と言うが、日本人は「お茶飲みに行こうか」という。それほど「お茶」は日本人の日常生活に深く入り込んでいることがわかる。実際に私が見た日本人はお茶をよく飲むだけでなく、生活の中でさまざまにお茶を活用していた。それほど日本茶を除いて日本の文化を論じることはできないと思う。それで今回「日本茶」をテーマにして今まで知らなかった日本人の生活全般に広がっている茶文化を幅広い体験してみようとした。

③ 金 惠眞 (キム・ヘジン) ハンシン大学 日本地域学科

テーマ：「女性だけの究極の夢の世界～宝塚歌劇団」

私はただ女性が男装をして芝居するのが面白くて宝塚歌劇団に興味を持つようになったが、彼女たちを見れば見るほどその不思議な魅力にはまってしまう。芝居だけではなく、つねに笑顔で、礼儀正しいその姿は一朝一夕では身につけることができないものだ。では、それを可能にしたものとはなんだろうか。

私はまだ彼女たちの素晴らしい舞台を実際に見たことがない。今回の「日本体験コンテスト in 大韓民国」を通じて宝塚歌劇団の本場である宝塚大劇場で、95年にわたる感激の歴史の産物を実際に感じてみたい。舞台を見れば、今まで宝塚歌劇団を支えてきた歴代タカラジェンヌたちの強い思いと小林一三の経営者としての素晴らしさを時代を越えて感じられるような気がする。そして、それだけで終わるのではなく、沈滞している韓国の国劇がこれから進むべき道を探すためにもとてもいい勉強になると思う。

④ 李 正善 (イ・ジョンソン) ソウル大学 博士課程 国史学科

テーマ：「明治維新の現場へ」―鹿児島、萩、東京への紀行―

私は韓国の歴史を勉強している大学院生です。特に韓国が日本の植民地になった時代、則ち、いわゆる「近代」を専門にしています。それで19世紀以後、西欧の侵略に直面した韓国と日本政府が各々近代化の為どんな努力をしてきたか、又、その後、両国の相互関係はどうなったか等に興味があります。明治維新の主役になったのは薩摩、長州という現在の鹿児島、萩地方を中心とした旧藩でした。又、明治維新の結果、幕府が直轄していた江戸は「東京」として日本の新しい首都になりました。それで明治維新の現場を訪ねようとするなら、この三ヶ所以外は他ないと思います。私はこの三ヶ所へ次々に行って、日本近代化の精神や雰囲気を自ら体験して見たいです。

⑤ 柳 一 (ユウ・イル) 慶熙大学 日本語学科

テーマ：「職人の魂が感じられる世界的な日本の楽器技術」

韓国第一のサクソリペアマン、そして世界からも認められるリペアマンになること。それが私の夢です。現在韓国では専門的に教育を受けた専門リペアマンが足りない状況にあります。リペアマンの基本である楽器と奏者に対する尊敬と愛をもっているリペアマンもほとんどいません。そのせいで、多くの奏者たちがいろんな不便の中でせいかつしています。音楽の教育、楽器の製作と流通、販売、公演に繋がっている日本の音楽文化の中で、世界的な日本の楽器技術と職人の魂はどのように生きているのかを感じたいです。その貴重な経験は自分の夢を叶えるための大きな基盤になろうと思います。



後列左より李正善、崔完鍋、柳一、金瑛映、金惠眞

前列左より北原賢三評議員、李康民審査委員、黒田勝弘審査委員長、菊川長徳審査委員